

弔 辞

吉 川 一 義 Kazuyoshi YOSHIKAWA

吉田城さん。城さんは、私が東大の仏文大学院博士課程二年のときに修士課程に入学してこられましたから、三年後輩にあたりますが、それ以来、じつに三十余年の長きにわたり、ブルースト研究の親しい仲間としておつき合いいただきました。四月のご入院には仰天しましたが、すこしずつ快方に向かわれ、今月はリハビリも始められたと伺っておりましたので、突然の訃報がいまだに信じられず、ただただ呆然としております。

吉田城さんは、日本を代表するブルースト研究者で、とくに『失われた時を求めて』の未発表草稿にもとづく小説生成過程の解明で、世界的に高い評価を受けておられました。この分野で一九七八年にパリ＝ソルボンヌ大学に提出されたフランス語の博士論文は、いまでも頻繁に引用される基本文献です。また一九八七年には、『失われた時を求めて』の権威あるフランス語刊本であるプレイヤッド文庫の改訂に参画され、膨大な量の小説草稿に詳細な注解を付して刊行されました。吉田さんのテキスト校訂のおかげで、世界中の『失われた時を求めて』の愛読者が、ブルースト小説の推敲過程を手にとるように理解できるようになったのです。吉田さんは、この分野の研究成果を『「失われた時を求めて」草稿研究』という日本語の総合的著作にまとめられたほか、『対話と肖像－ブルースト青年期の手紙を読む』など、数多くの先駆的なブルースト研究書を著されました。その広範かつ緻密な学識は、『神経症者のいる文学－バルザックからブルーストへ』などの著作をはじめ、内外の単行本や雑誌に寄稿された夥しい量の論文に遺憾なく示されています。

吉田さんは、この膨大なお仕事を、週に三回、透析に通いながら成し遂げられました。二十年前、パリで透析を始められたのも、東洋語学校で教鞭を執るかたわら、仏和辞典のゲラを訂正し、さらにプレイヤッド版に収録するブルースト草稿原稿と注解を作成するという殺人的スケジュールの無理がたたった結果だと聞いております。文字どおり仕事に殉じた生涯だったと申しあげるほかありません。それだけでも常人にはマネのできない偉業ですが、私が深い畏怖の念を覚えますのは、城さんがいつも笑みを絶やさず、献身的に周りのかたの面倒をみておられたことです。ご自身の病状を嘆いて人に気を遣わせることのないようにという、城さんらしい心優しいおもいやりだっ

たにちがいありません。城さんの洒脱な身のこなしと同じで、そのダンディズムは徹底していました。二〇〇三年九月のブルースト国際シンポジウムでは、主催者として会の運営に奔走されるなか、ブルーストの病気の意味について、ご自身の病状を「笑い」の種にされたご発表は、いまでも脳裏に焼きついています。

吉田さんとは、『ブルースト書簡集総合索引』や『ブルースト全集・別巻』の編纂、さらには昨年秋にチャンピオン書店から出版された千ページ二段組の『マルセル・ブルースト事典』など、数えきれないほど多くの仕事にご一緒させていただきました。ともにすごした日々でいちばん楽しかったのは、一九九七年夏に、ノルマンディー地方スリジー・ラ・サル古城で、世界各地のブルースト研究者数十人と寝食をともにした一週間の合宿シンポジウムでした。そのときも城さんは、三日に一度、十キロほど離れた町の病院までタクシーで透析に通っておられましたが、いつの間にかそっと席を外しておられ、ふと気がつくと、また例の達者なフランス語で、発表者をたじろがせる鋭い質問をしておられるのでした。

今年の二月ごろ、吉田さんから届いたメールに、肝炎ウイルスが見つかったので、春休みを利用して入院し、インターフェロン療法をする予定だと書いてありました。そのなかに「週三回の透析がしだいに辛くなってきました」と、珍しく弱気な発言があって驚かされました。さらに「肝腎（肝臓と腎臓）をやられてまだ生きているのが不思議だ」とか、「すばらしい研究仲間に恵まれて幸せな人生を全うできそうです」とか、「余生は好きなことをしてのんびりすごしたい」とか、まるで死期を自覚したかのような文言が散見されたことが、吉田さんの訃報に接したとき、ふと想い出されました。

吉田さんは、ふつうの人の何倍もの病苦をしょいこみ、人の何倍もの仕事をこなし、人の何倍もの猛スピードで人生を駆け抜け、五十四歳で天に召されました。つくづく人生の不条理を呪わずにはいられません。しかし吉田さんの滞在先が病院から天国に替わっても、私の心には、あの笑顔から「吉川さん、忘れてたらダメじゃないですか」という励ましのお声が、ご生前にもましていっそう強く響いてくるような気がいたします。吉田さんの奮闘の甲斐あって立派なご業績がのこり、それを受けつぐ若く優秀な後継者たちも育ちました。あとは残された者のご遺志をついで、吉田さんの偉業に恥じない仕事をしてゆく所存です。

城さん、長年にわたるご奮闘ありがとうございました。もう病院に通わなくていいのです、透析の苦しみはおわりです、安心して、どうかゆっくりお休みください。

二〇〇五年六月二十七日

吉川 一義

(よしかわ・かずよし 京都大学大学院文学研究科教授)